

転施文が大半を占めており(図181-5～183-10)、単軸絡条体1類の縦回転施文がわずかに混じる(図183-11～15)。また胴上部と下部の施文原体が異なるもの(図181-7)や、胴部にも帯状に結束第1種が横回転施文されるもの(図182-6)もみられる。

図183-16～図184-18は前期の粗製土器として一括し、I群C類としたものだが、出土状況からみてI群B類に共伴するものである。また胴部や底部個体については分類基準となる口縁部が無いため本類としたもので、本来的にB類の可能性が高い。口縁部には結束第1種が横回転施文されるもの(図183-16～図184-5)と、口縁部が無文のもの(図184-6)がみられる。ともに文様帯の境界となる頸部に原体の側面圧痕や隆帯等が無いものだが、図183-16や図184-1では口端にのみ原体の側面圧痕が施される。胴部施文はI群B類と変わらず、複節縄文や単軸絡条体による縦走縄文が施されている。また高台付の深鉢もみられるようである(図184-1,18)。

図184-19～25はII群土器である。19はA類の円筒上層a式に、20～25はF類の榎林式に比定される。

図184-26～31はIII群土器である。26はA類の牛ヶ沢(3)式、27はB類の螢沢式に比定される。また30,31は摩滅が著しいがIII群E類とした後期後葉の十腰内IV式であろう。

なお前述の通り、沢支流2から土器は出土していない。(神)

**剥片石器**(図185・図186)：剥片石器は176点、剥片・破碎片と合わせて約52kg出土しており、沢本流・支流をあわせた中で最も出土量が多い。そのうち31点を図示した。各器種とも出土しているが、スクレイパーの出土が半数近くを占め、次いで石匙、石核の順に出土数が多い傾向が見られる。

図185-1～4は石鏃。1・2は無茎凸基のI d類、3・4は有茎凸基のII c類で、3は基部が非対称形となっている。図185-6は小型石槍I c類、図185-7は石槍II a類である。図185-8は石筥II a類である。図185-5・9・10は石錐。5はつまみ部を持つII類。9・10は棒状のI類で、10の錐部には摩耗が見られる。図185-11～17は石匙で7点を図示した。11～16はI類で、17は斜軸型のIII類とみられる。図185-18～22・図186-1～6はスクレイパー類。I類2点、II類7点、III類2点の計11点を図示した。I a類は図18-19、I b類が図18-18。II a類は図185-20・21・図186-1で、II b類は図185-22・図186-2～4である。このうち図185-22はノッチドスクレイパーである。III a類は図186-5・6である。図186-8は両面調整石器で、III類である。図186-7・9・10は石核。7はIIあるいはIII類、9はII類、10はIII類である。

**磨製石斧**(図187-1・2)：7点中2点を図示した。1・2はIII類としたが、ともに基部が破損した定格式磨製石斧とみられる。なお、沢支流1からは擦り切り磨製石斧部材が1点出土しており、西捨て場出土の部材と接合している(図157-7)。

**礫石器**(図187-3～9)：礫石器は16点、総重量約5kg出土しており、そのうち7点を図示した。3～5は敲き石。3点ともに側縁・端部使用のIII c類である。5は礫ではなく、珪質頁岩製の剥片を素材とし一側縁を使用している。6は磨り石III a類である。全面に敲打痕が見られ、一面が磨りに使用されている。7は半円状扁平打製石器I類。板状礫を素材とし、一側縁に狭小な機能面が認められる。8・9は凹み石で9が一面使用のI類、8がII面使用のII類である。8の一面は磨りに使用されており、線状痕が明瞭に残存する。9は一端部が剥離によって抉られており、石錘である可能性も考えられる。

**石製品**(図187-10・11)：軽石製品を2点図示した。図187-10は楕円形に成形されており、図187-11は側面に線状痕が明瞭に認められ、5面体に成形されている。

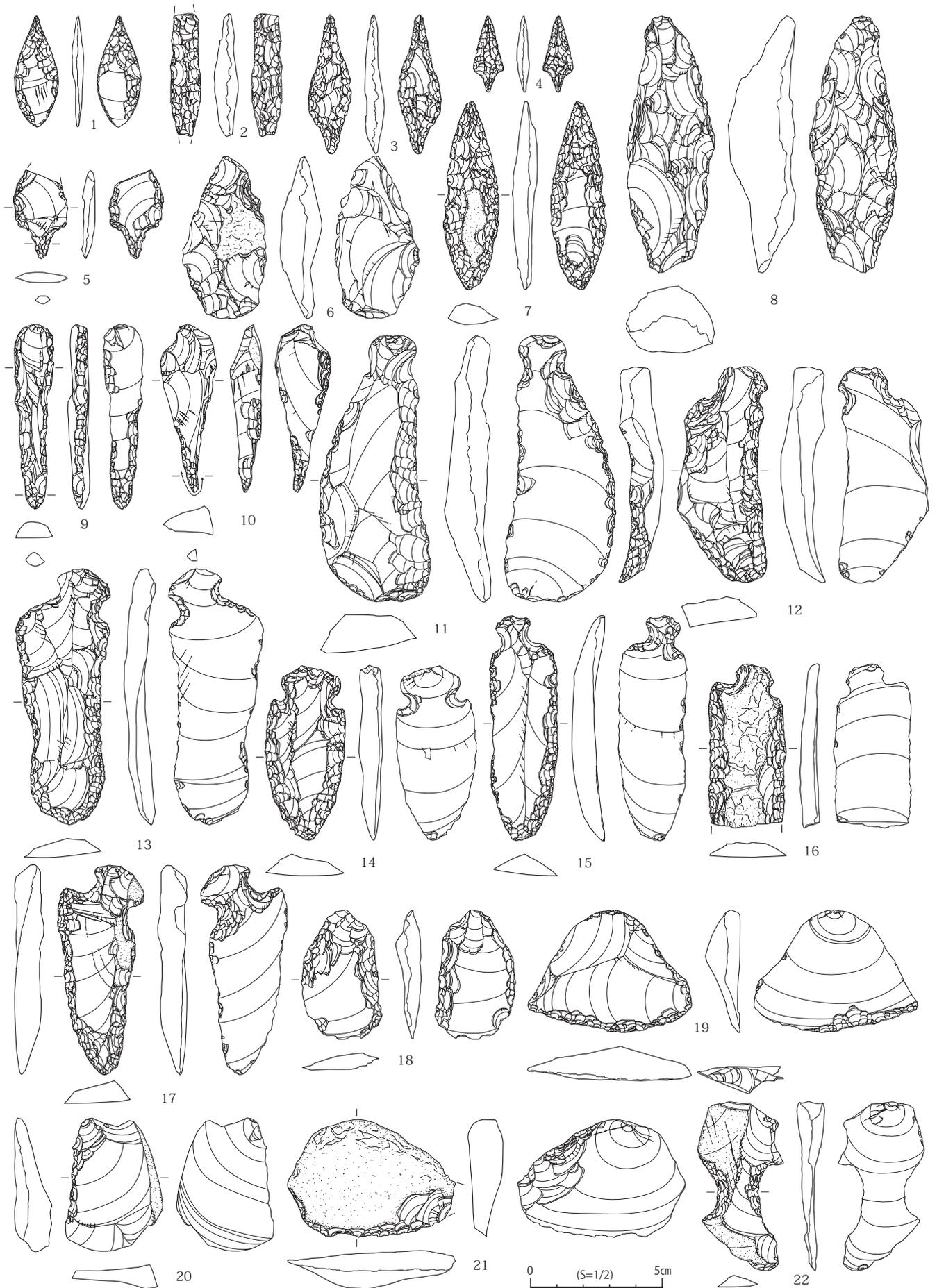


図185 沢支流1出土遺物(5)



图186 沢支流1出土遺物(6)

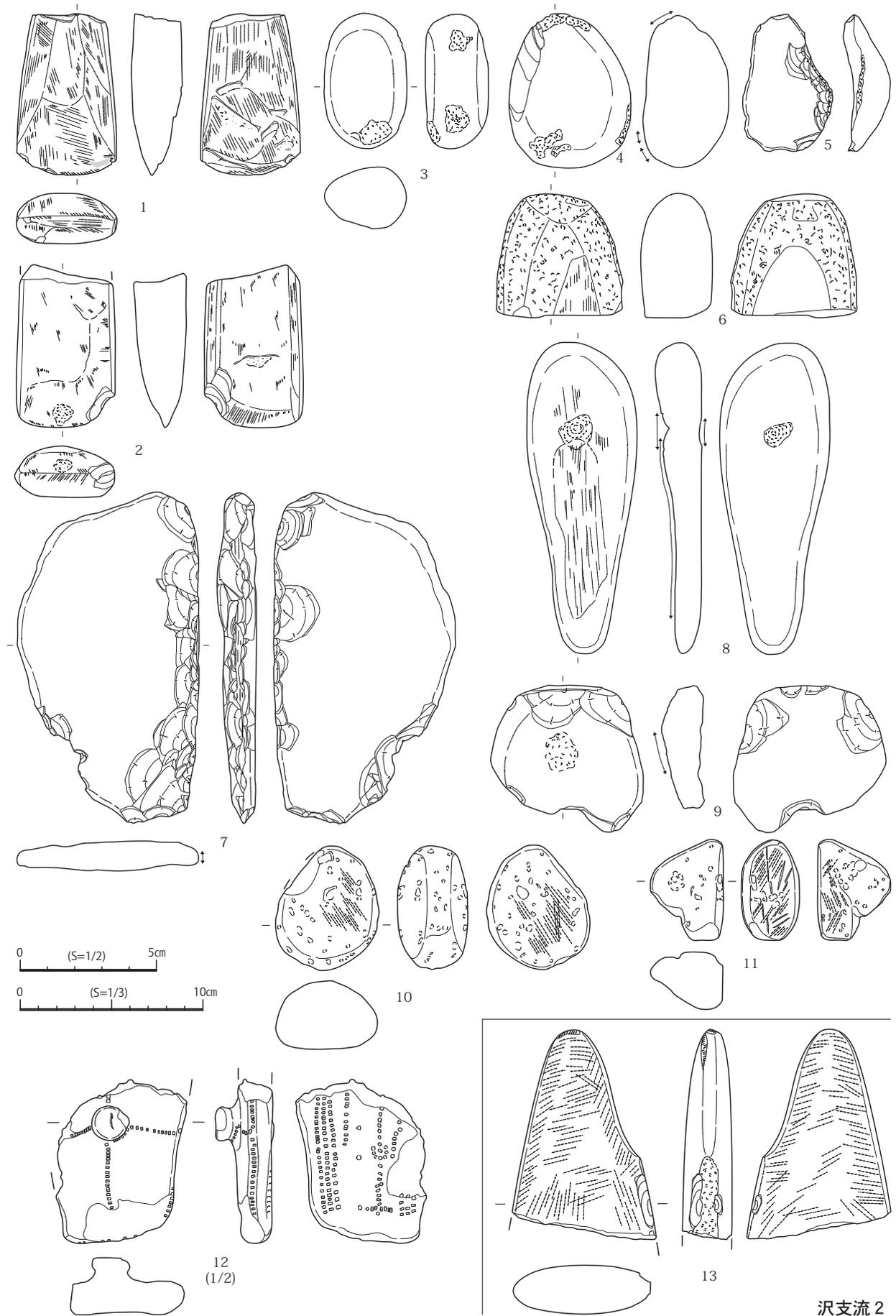


図187 沢支流 1・2 出土遺物(7)

**土製品**(図187-12)：土偶を1点図示した。図187-12は板状土偶の胴部～脚部破片である。臍を中心に十字、側面・裏面は縦位を主体とした刺突文を施している。文様から、円筒上層c式期に相当するものと考えられる。(業天)

**沢支流2出土石製品**(図187-13)：図187-13は刃部と棟部を欠失した青竜刀形石器と思われる。柄部は極端に短く、緩いカーブを描く棟部の縁は平坦に作られている。富樫のいうA-2型式に相当するものだろうか(富樫1983)。(小田川)

**【小結】** 沢支流1は沢頭を利用した小規模な遺物捨て場であり、出土土器の観察から前期末葉のある期間内において遺物を廃棄しているものとみられる。近接する沢支流3や沢支流4とほぼ同時期に使用されているようで、西捨て場とは廃棄時期について時期差がみられ、沢支流1が古い。また重層的・連続的に使用されている北捨て場とは形成状況が異なる。沢支流2は捨て場としては使用された痕跡はみられなかった。集落の立地する丘陵平坦面から離れていることも一因であろう。(神)

## 8 沢支流3(図167・188～193)

**【検出と調査状況】** 沢支流3は他の沢支流と同様に調査段階では完全に埋没していたが、先行していた沢本流の調査中に沢の合流部を検出し、ここに支流があることがわかった。その後沢頭部分の調査を行い、多量の土器が廃棄されている状況が明らかとなった。

**【立地と規模】** 沢支流3はB区南西側に位置する(図167・188)。XIVK・L-128グリッド付近からほぼ真西に向かって流れ、XIVI-121グリッド付近で沢本流及び沢支流4と合流する。延長は約30m、沢頭と合流部の比高差は約7mである。なお12グリッド・192m<sup>2</sup>の範囲を沢支流3の流域範囲とした。

**【層位】** 大きく6層に分層したが、最下層の第6層は腐植土を主体とする自然堆積層で、その上の第4・5層が遺物包含層である。層厚は約30cmで、沢支流3の沢頭付近を全面的に覆っており、人為的に廃棄された物である可能性が高い。上層の第3層は黒色土で、自然堆積層とみられる。

**【遺物の出土状況】** 沢支流3も沢支流1と同様、沢頭付近に大量の土器が廃棄されていたが、特に北側となるXIVL-127グリッドの集中が著しい。また層的に重複する状態ではなく、ほぼ単一の面として廃棄遺物が検出されていることから、ある一定期間において集中的に廃棄されたものとみられる。なお流域範囲外とした沢本流との合流部付近では遺物はあまり出土していない。

**【出土遺物】** 以下から遺物を個別に記載するが、土器は時期毎に、石器は器種毎に図示する。

**土器**(図189～191)：土器は重量で約76kgが出土した。沢支流1や沢支流4と同様にI群土器が大半であり(図189・190)、少量のII・III群土器(図191)が混入する。古手とみられるのが図189-1～3で、I群A類の円筒下層c式に比定される。図190-1は単軸絡条体5類が、図190-2は6類が口縁部に回転施文されるもの、図190-3は結束第1種の羽状縄文とLR縄文の側面圧痕が施されるものである。図189-4～図190-14は口縁部には原体の側面圧痕が、胴部には縦走縄文が施されるものでI群B類である。口縁部に関しては文様帯幅が3cm前後であり、側面圧痕として単節・複節の縄文原体や単軸絡条体を使用され、三角形や菱形、平行線等のモチーフに加えて波頂部等に縦位の側面圧痕が加えられる。胴部の縦走縄文に関しては、複節縄文の斜回転施文(図189-4～図190-8)と、単軸絡条体1類の縦回転施文(図190-9～12・14)の2種類がみられる。単軸絡条体には単節縄文の使用が大半であるが、図190-11では複節LR縄文が使用されているほか、図190-10は巻きが緩く条間が広いものである。

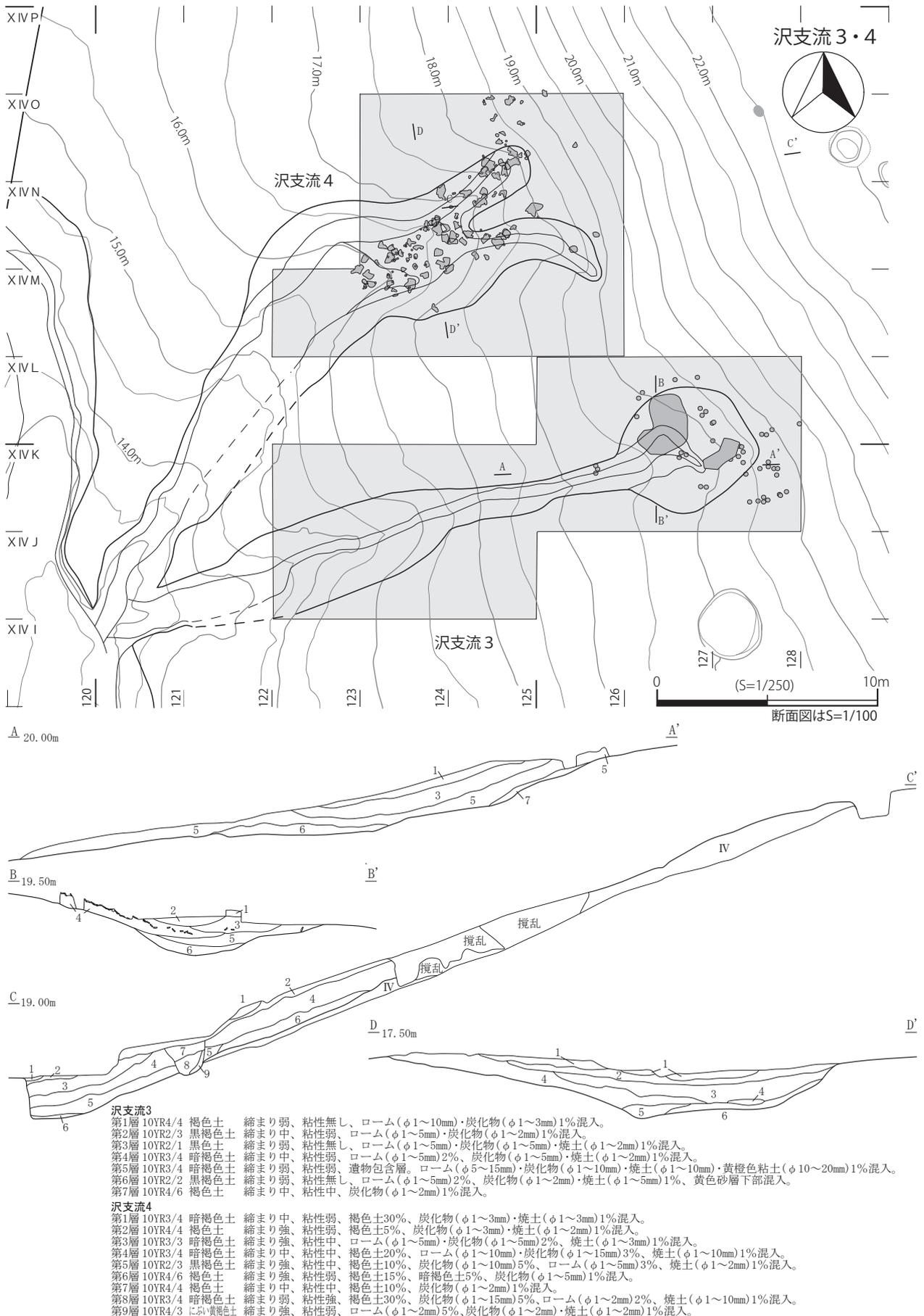


図188 沢支流 3・4

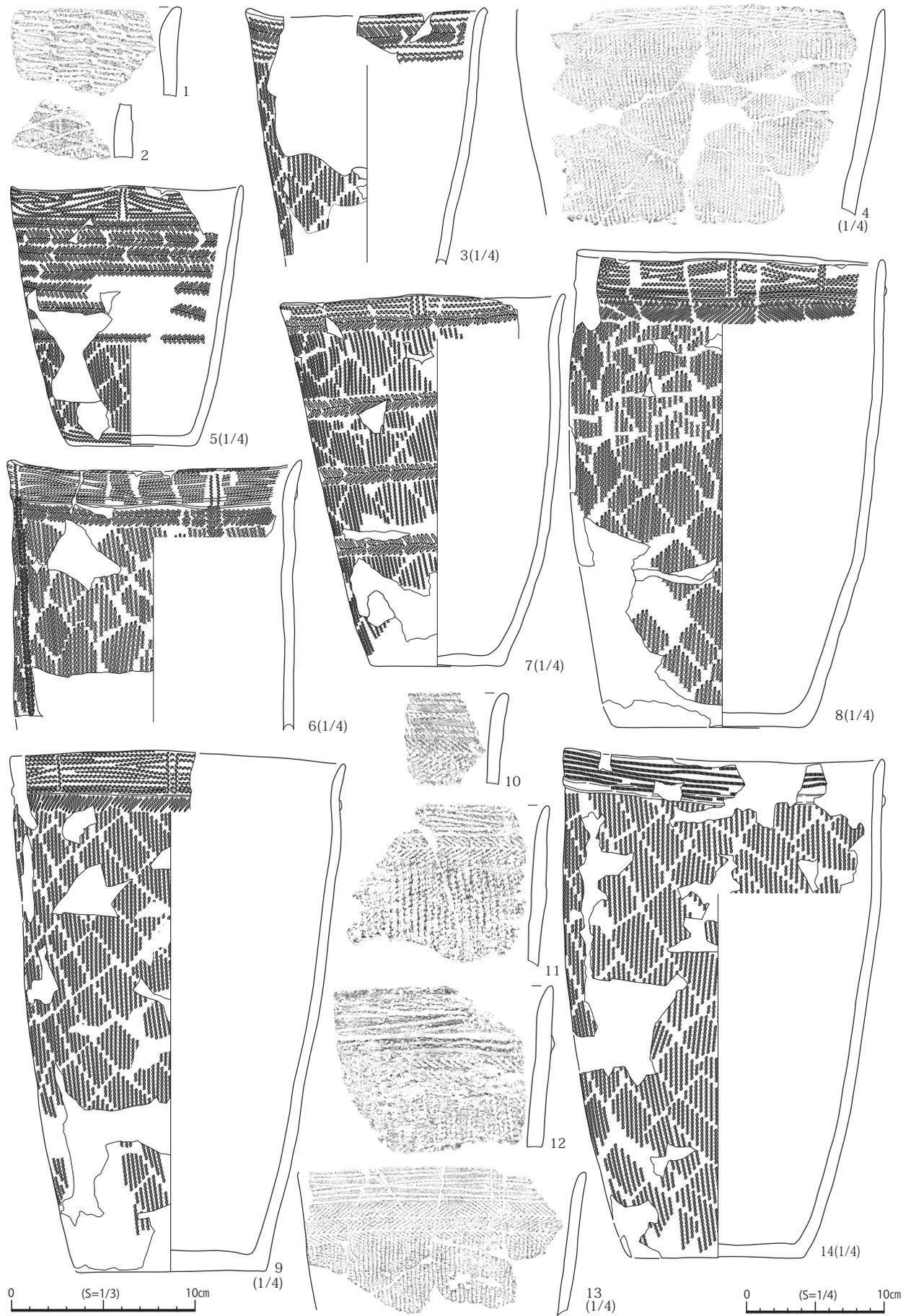


図189 沢支流3出土遺物(1)

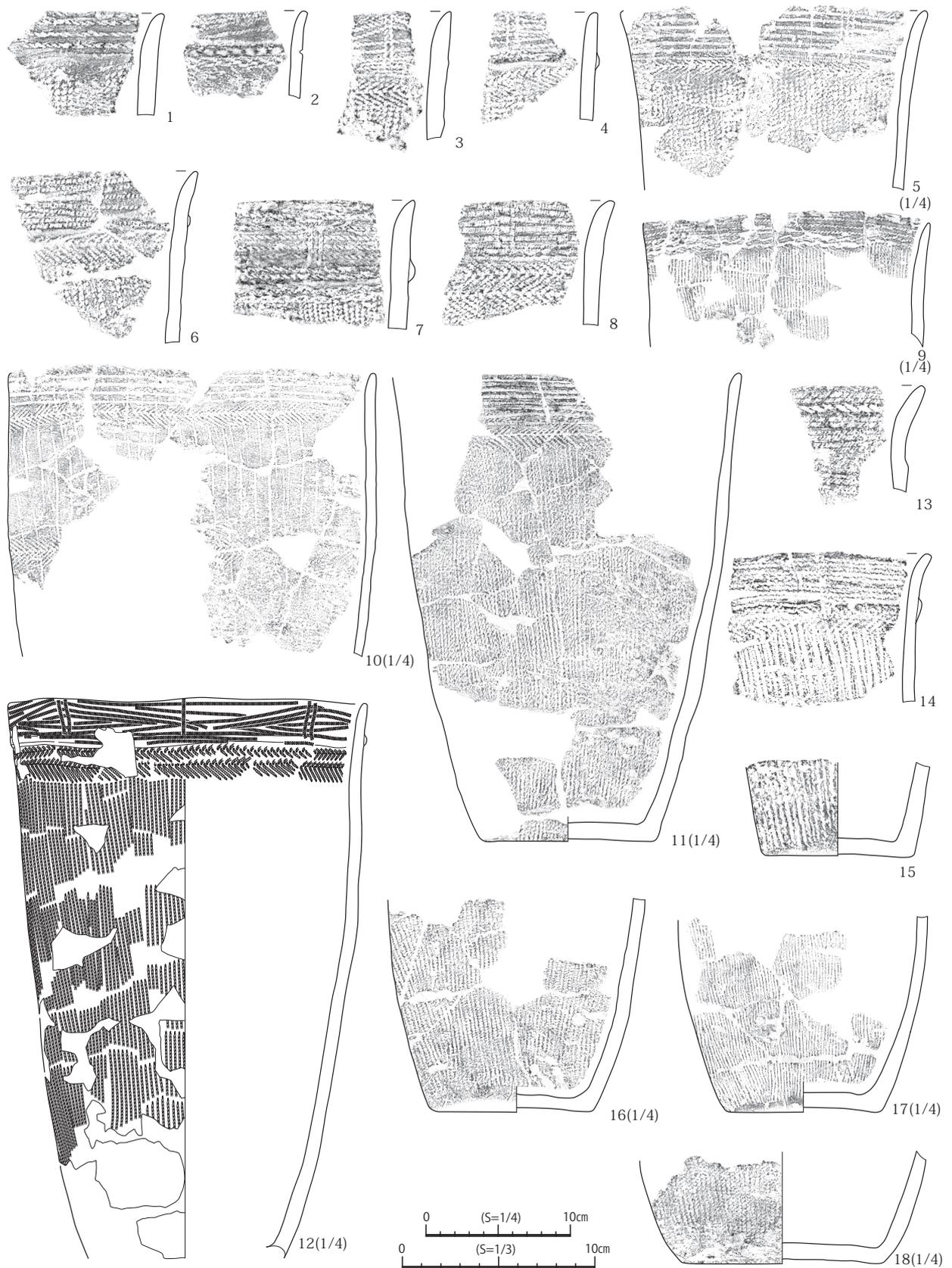


図190 沢支流3出土遺物(2)

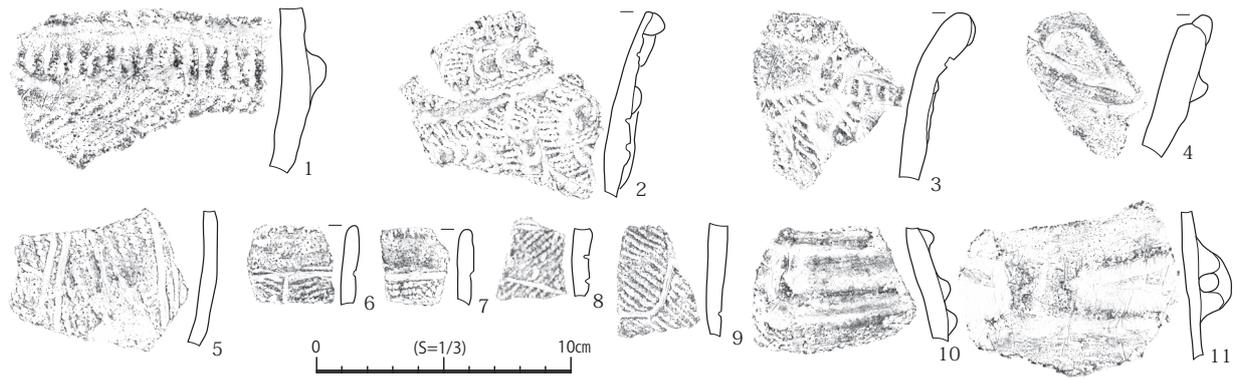


図191 沢支流3出土遺物(3)

頸部には結束第1種による羽状縄文が1～2段の横回転で施文されるのが大半であるが、図189-7や図190-10では胴部にも間隔をあけて施文されるほか、図189-5では胴部上半全てが結束第1種により施文されている。また図189-6では口縁部の縦位圧痕施文にあわせて胴部にも結束第1種が縦回転施文されている。結束第1種施文の他には結節回転文が頸部に施されるものもみられる(図190-9)。頸部についてはこの他に隆帯が施されるものが多数存在する(図189-6・9等)。図189-4～図190-12・14に関しては以上の諸要素について共通性の高いもので、おおよそ円筒下層d1式に比定されるが、出土状況から検討してもまとまりのある資料とすることができよう。なお厳密に割合を比較したわけではないが、支流1に比して単軸絡条体の使用個体が目立つようである。残る図190-13は口縁部幅が広く屈曲がみられるもので、後出的要素から円筒下層d2式に比定される。また図190-15～18は底部破片のためI群C類の粗製土器として一括した。

Ⅱ群土器では口縁部に馬蹄形状圧痕の施されるもの(図191-2)、刺突の施されるもの(図191-3)、波頂部に楕円形状の貼付が施されるもの(図191-4)がみられたが、それぞれB類の円筒上層b式、C類の同c式、D類の同d式に比定される。図191-1は隆帯の施されるもので円筒上層期の頸部破片とみられる。図191-10はF類の榎林式、図191-11～14は同一個体でH類の大木10式並行の土器であろう。またⅢ群土器では隆帯と橋状把手の施される壺形土器の破片が出土しているが、おそらくA類の牛ヶ沢(3)式からB類の蛸沢式にかけてのものとみられる。(神)

**剥片石器**(図192-1～11)：剥片石器は69点、剥片・破碎片と合わせて約14kg出土しており、そのうち11点を図示した。1は石鎌で、無茎凸基のI d類。2・3は石槍の破損品である。3は斜破断のIV b類である。4は石篋Ⅱ b類である。図192-5・6は石匙で、5は縦型のI類。縦長剥片の末端につまみ部を設けている。6は斜軸型のⅢ類である。7～9はスクレイパーで、7は両面調整のI d類、8は背面調整のⅡ b類、9は腹面調整のⅢ a類である。図192-10・11は石核。10はⅢ類、11はⅡ類である。

**磨製石斧**(図192-12)：1点のみ出土した。図192-12はⅢ類。緑色片岩製である。一側面は段状をなし、凹凸を消すように研磨調整がなされる。凹凸は製作時のものか破損によるものかは判然としない。Ⅲ類としたが、石材・形態からみて擦り切り技法によって製作された可能性がある。

**礫石器**(図192-13・14～図193-1～4)：礫石器は11点、総重量約3.7kg出土しており、そのうち6点を図示した。図192-13は敲き石である。両端部使用のⅢ c類で、一端部には使用による剥離が見られ、面的な使用が認められる。図192-14・図193-1・3は磨り石である。図192-13はI a類。全面を磨りに使用しており、微細な線状痕が見られる。図193-1・3はI c類で、一側縁を磨りに使用し

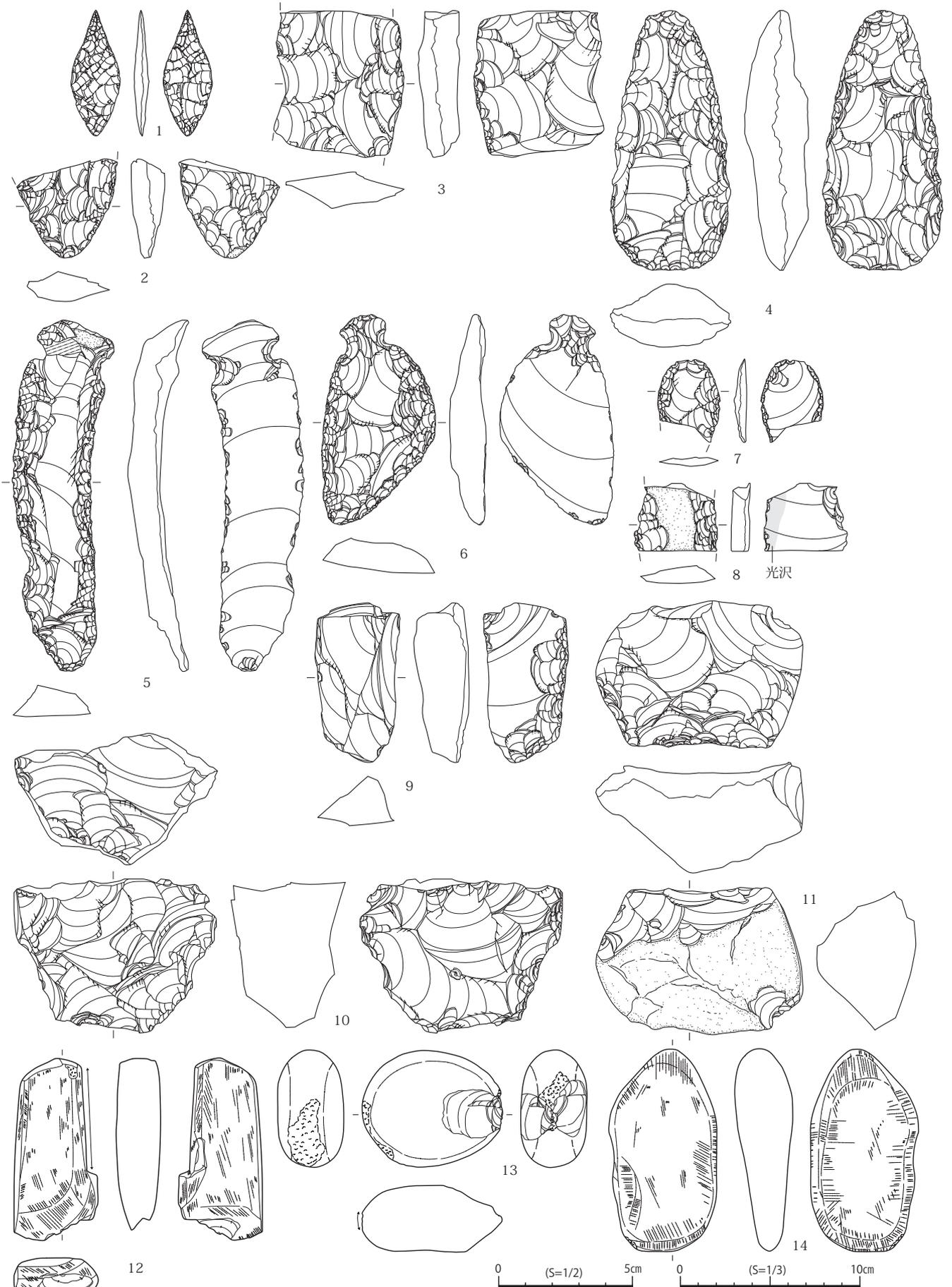


図192 沢支流3出土遺物(4)

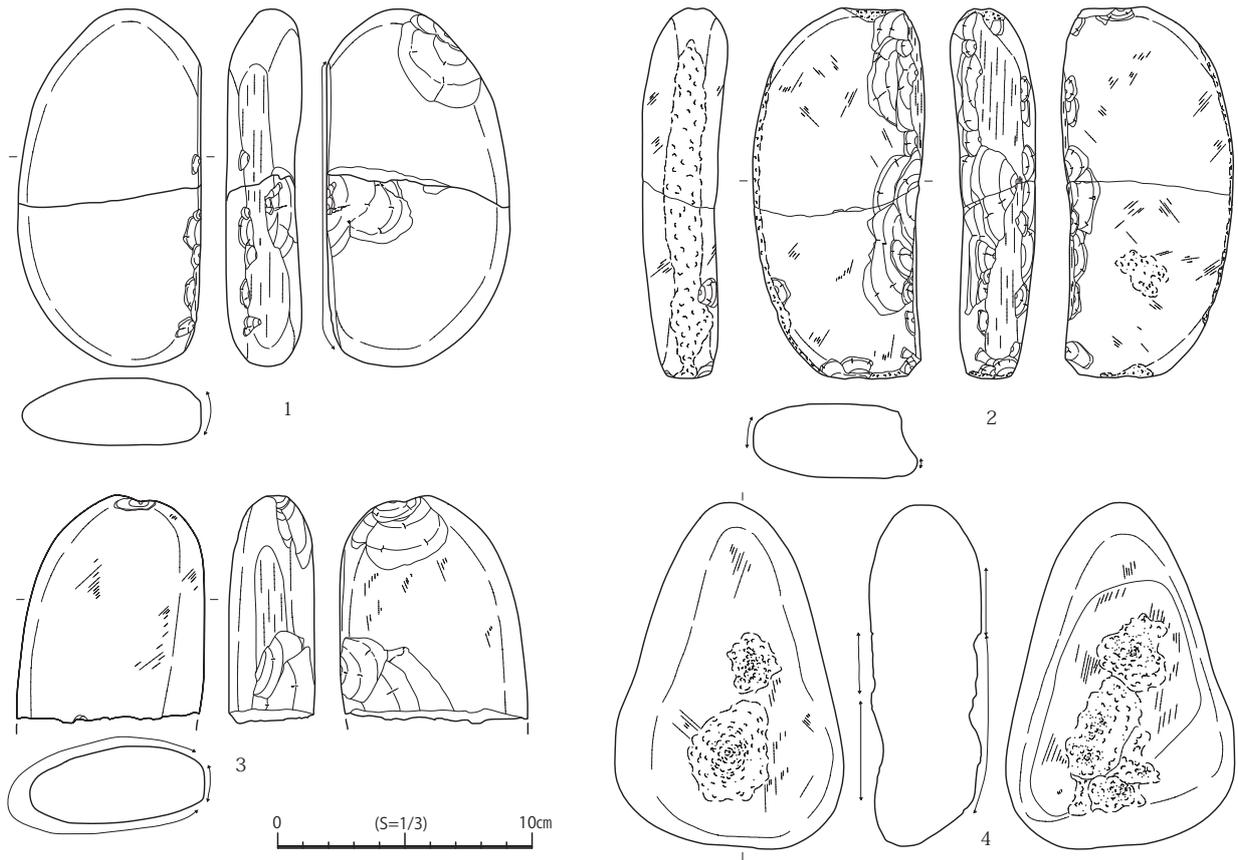


図193 沢支流3出土遺物(5)

ている。3の端部には剥離による抉りがある。図193-2は半円状扁平打製石器Ⅰ類で、周縁部には北海道式石冠と相似した敲打痕が見られる。両端部も敲打調整がなされるが、直線的な形状となっている。図193-4は凹み石で二面使用のⅡ類である。両面を磨りにも使用している。 (業天)

【小結】 沢支流3は他の支流1や支流4と同様に、小沢の沢頭を利用した小規模な遺物捨て場であり、時期についても他沢支流同様に前期末葉のある期間内(円筒下層d1期)において形成されたものとみられる。該期の遺構については同時に調査されたB区の南側の丘陵平坦面から多く検出されており、北となるA区やB区北側からの検出は少ない。このことから該期にはB区側が活動の中心であることが理解されるが、沢支流3や沢支流1・4の捨て場形成もそれを支持する証左となろう。 (神)

## 9 沢支流4(図167・188・194～201)

【検出と調査状況】当初、沢支流4の部分は北側にある西捨て場の延長部分として掘り下げを行い調査していたが、先行していた沢本流の調査中に沢の合流部を検出し、そこに続く沢の谷頭部分に多量の土器を廃棄している状況であることがわかったため、沢支流4として調査をしたものである。

【立地と規模】沢支流4はB区南西側に位置する(図167・188)。XIVN-125・126グリッド付近から南西に流下し、XIVI-121グリッド付近で沢本流及び沢支流3と合流する。延長約29m、沢頭と合流部の比高差は約6mである。なお10グリッド・160㎡の範囲を沢支流4の流域範囲とした。

【層位】9層に分層した。初期堆積土に相当するのが第5層で、腐植土を主体とする自然堆積層である。遺物包含層はその上の第4層であり、沢支流4の沢頭付近を全面的に覆っている。層厚は約20～40cmで、人為的に廃棄されている可能性が高い。上層の第3層は暗褐色土で、自然堆積層とみられる。

【遺物の出土状況】沢支流4も沢支流1や3と同様、大量の土器が沢頭付近に廃棄された状況で、沢本流との合流部付近からの出土は少ない。出土状況についても沢支流1や3と同様で、遺物包含層(第4層)で面的な検出状況を示す。特に土器については個体毎の取上が可能な状況であり、ある一定期間において集中的に廃棄されたものとみられる。

【出土遺物】以下から遺物を個別に記載するが、土器は時期毎に、石器は器種毎に図示する。

**土器**(図194～197)：土器は重量で約128kgが出土した。沢支流1や3と同様にI群土器が大半を占め(図194～図197-6)、II群土器は少量混在する程度である(図197-7・8)。図194-1～6はI群C類の円筒下層c式に比定される土器で、単軸絡条体5類または6類が口縁部に回転施文されるもの(図194-1～4)と口縁部にLRとRL縄文の結束第1種及び側面圧痕が施されるもの(図194-5・6)である。

図194-7～図196-11、図197-1はI群B類で、口縁部に原体の側面圧痕、胴部に縦走縄文の施されるものである。口縁部の側面圧痕原体についてはR等の単節縄文や、LR等の複節縄文のほか、単軸絡条体1類が使用され、三角形や菱形、平行線等のモチーフが描かれるのは共通している。また口縁部文様帯の幅は3cm前後であり、5cmを超えるものは図196-11の1点のみである。胴部の縦走縄文については複節原体の斜回転施文のもの(図194-7～図196-4)と、単軸絡条体1類の縦回転施文(図196-5～10、図197-1)の2種類がみられる。このうち図196-5は単軸絡条体に複節縄文が巻き付けられて使用されているもので、沢支流1から同一個体が出土している(図183-10)また図197-1は横位の条痕が施された上から絡条体が縦回転施文されるもので、同様の施文手法をとる個体は本遺跡では出土していないが、おそらく北海道南部の該期の土器にみられる貝殻条痕文を下地にした施文方法に類似するものとみられる。また頸部施文については結束第1種による羽状縄文が1～2段横回転施文されるものが多く、胴上部にも施文されるもの(図194-7)や結節回転文に置き換わるもの(図196-5・9)、頸部にそうした横回転施文をしないもの(図194-15、図195-11)もみられる。また頸部には隆帯が施されるものも多い(図194-12・13等)。器形についてはほぼ直線的であり、口縁がわずかに外反し、胴中位から底部にかけてゆるやかに窄まるものが多い。口縁形態は平口縁か小波状口縁に限られ、大振りな波状口縁はみられない。これらのI群B類土器のうち、図196-11を除いたものについては、おおよそ円筒下層d1式に比定されるが、土器の諸要素については共通性が非常に高いもので、出土状況から見てもほぼ時間的にまとまりのある資料とすることができる。また同様の出土状況を示す沢支流3と同様に、沢支流1に比して単軸絡条体の使用個体が目立つ。図196-11については円筒下層d2

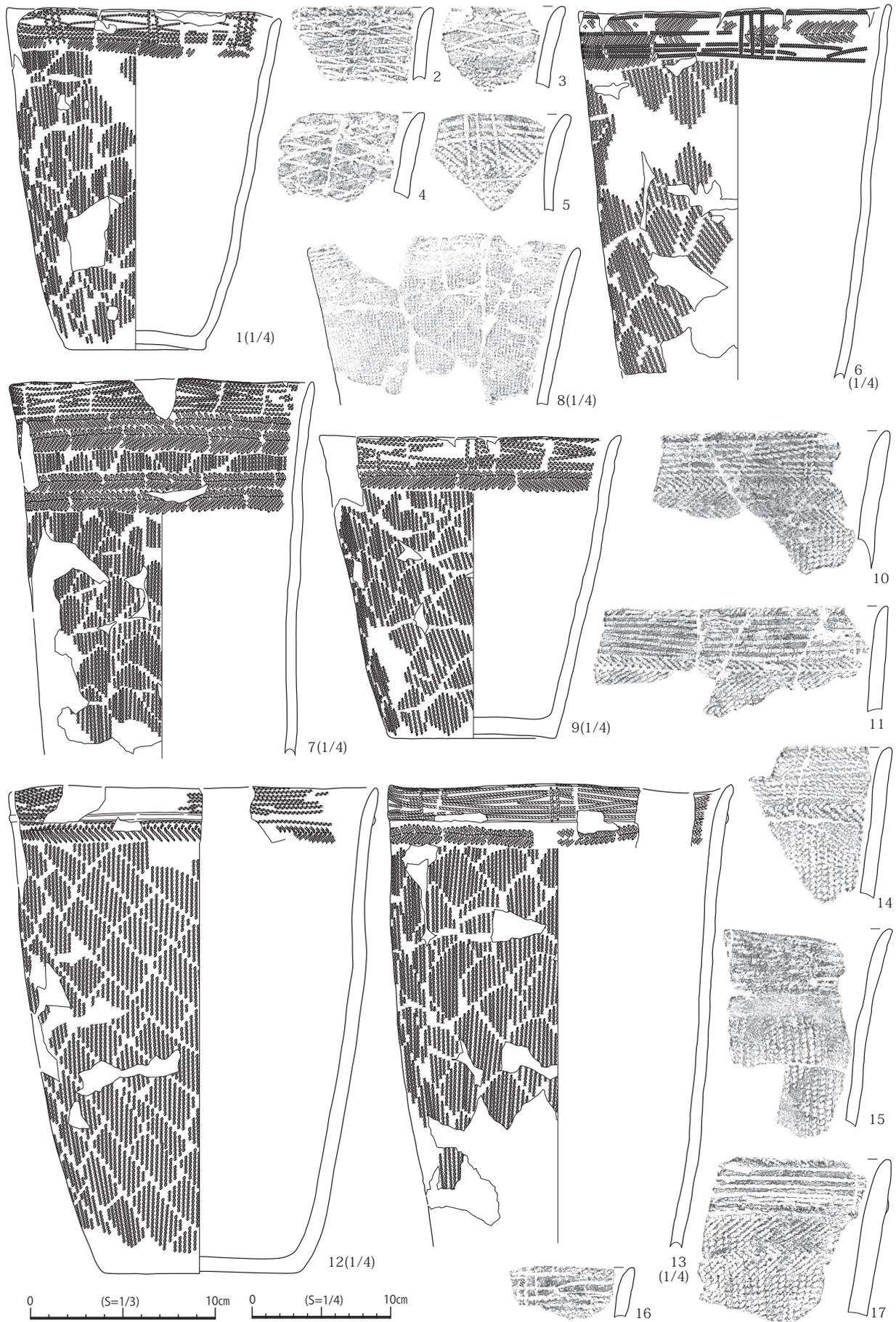


図194 沢支流4出土遺物(1)

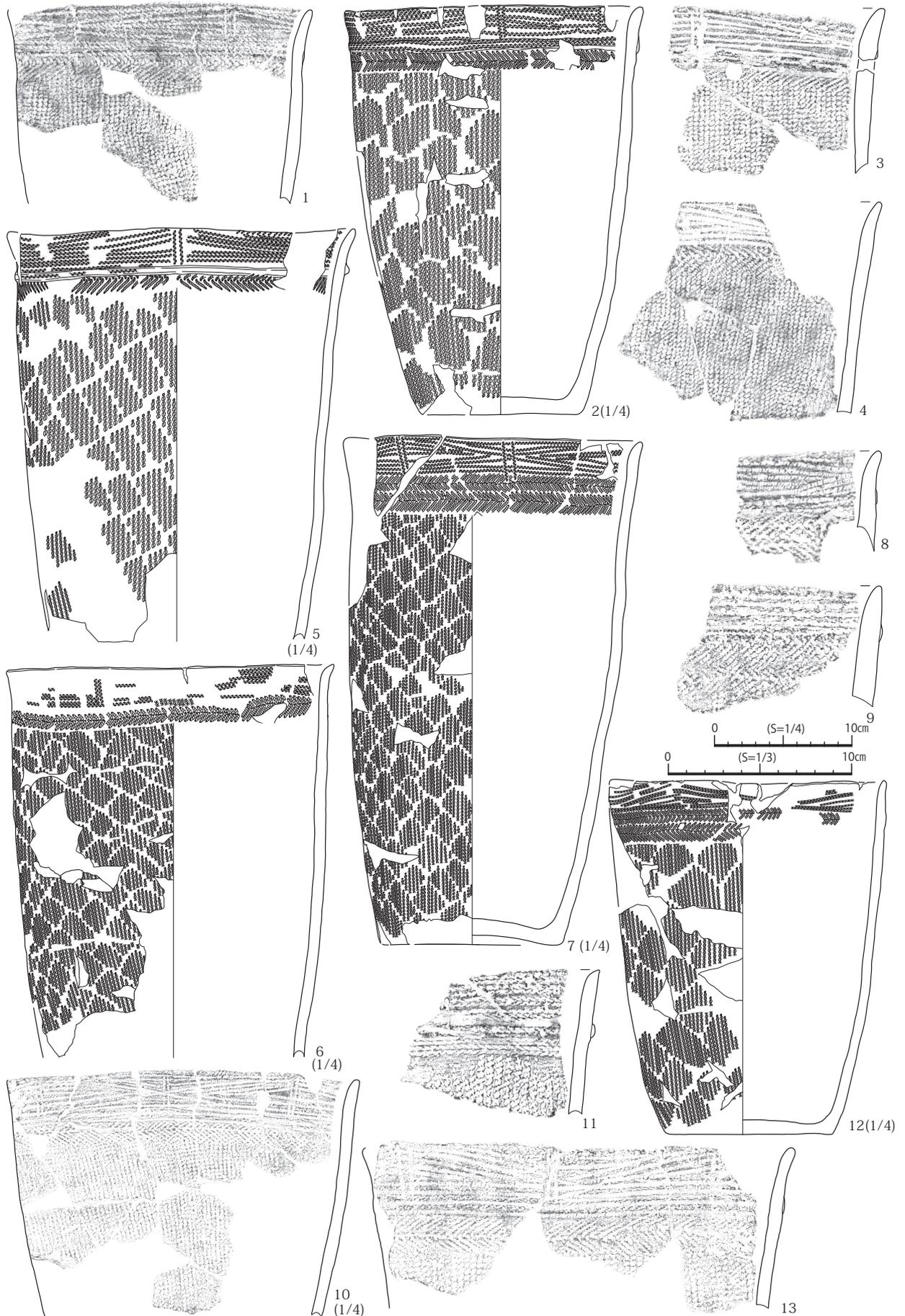


図195 沢支流4出土遺物(2)

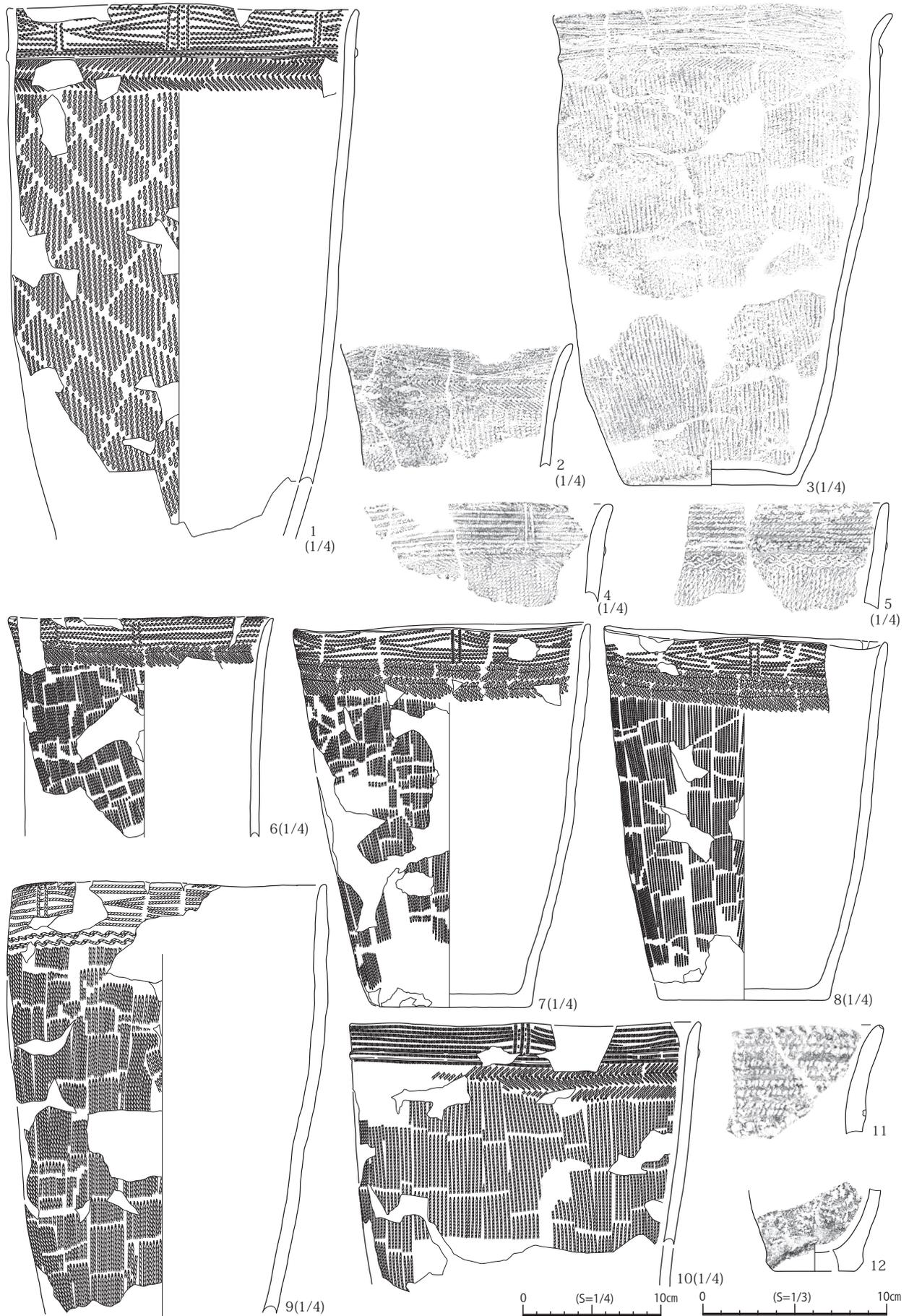


図196 沢支流4出土遺物(3)

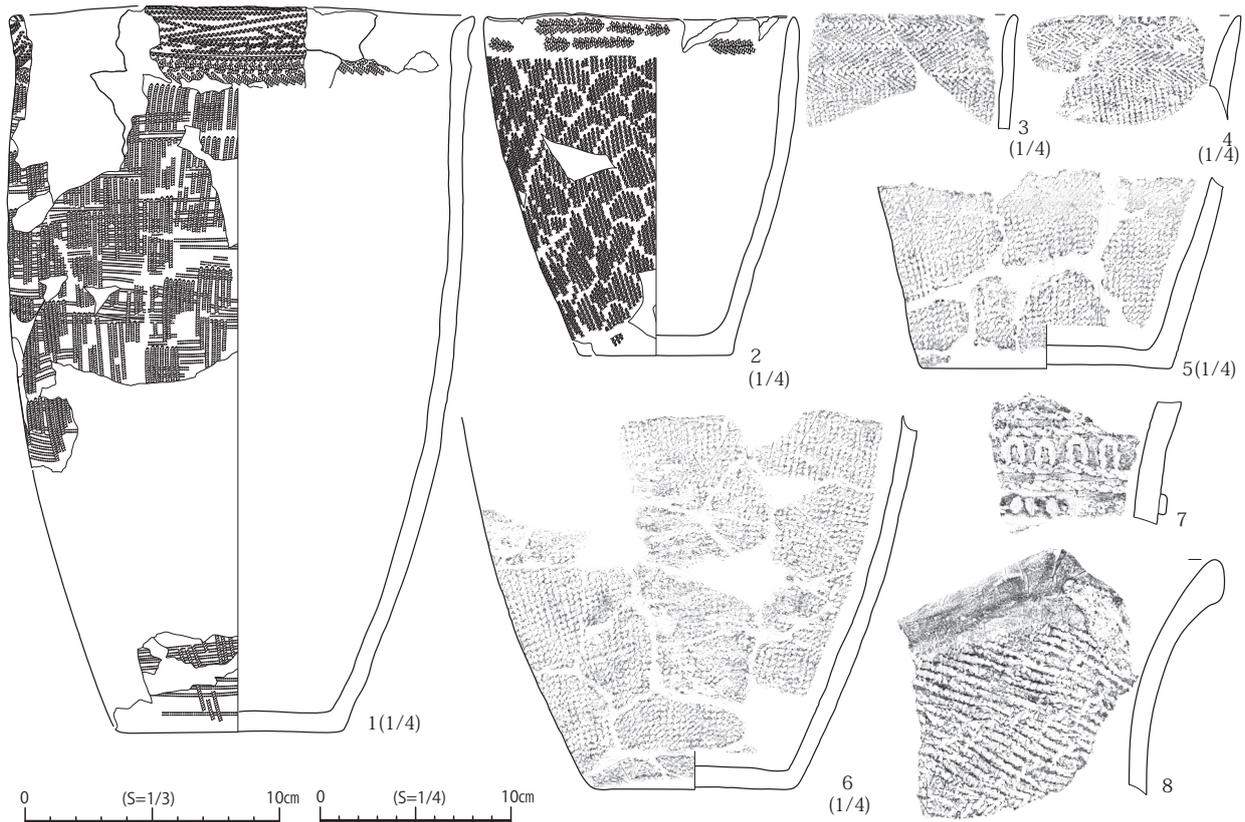


図197 沢支流4出土遺物(4)

式であろう。図196-12、図197-2～6はI群C類で前期末葉の粗製土器を一括したが、出土状況からはI群B類である円筒下層d1式に伴うものであろう。

II群とした土器は2点図示した。口縁部に馬蹄形状圧痕の施されるもの(図197-7)、波状口縁に地文縄文のみ施されるもの(図197-8)である。7はII群A類の円筒上層a式に、8はII群F類の榎林式にそれぞれ比定されるものである。(神)

**剥片石器**(図198～200)：剥片石器は95点、剥片・破碎片と合わせて総重量約24kg出土しており、そのうち28点を図示した。器種別に見ると支流1と同様、スクレイパー類・石匙の占める割合が高い。

図198-1～4は無茎の石鏃で、1は凹基のI a類、その他は凸基のI d類である。図198-5・6は石槍で、5はI a類。図198-7・8は石筥II b類である。図198-9～15は石匙で7点図示した。9・10は横型のII類、11は斜軸型のIII類、その他は縦型のI類である。図198-16～21はスクレイパー類で、33点出土したうち背面調整のII類6点を図示した。16はII c類、17はII c類、18～21はII a類である。図199-1は両面調整石器I又はII類である。図199-2～5・図200-1・2は石核で6点図示した。図199-2・3がII類、図199-4がI類、図200-1・2はIII類である。

**礫石器**(図201-1～9)：礫石器は21点、総重量約12kgが出土しており、そのうち9点を図示した。図201-1は敲击石で端部使用のIII c類。両面に摩耗が見られる。図201-2・3は磨り石である。2は一面使用のI a類。3は一側縁使用のI c類であり、器面に敲打痕・端部に剥離痕が見られる。図201-4は挟入扁平磨製石器。先端部破片であるがI類と考えられる。図201-5は半円状扁平磨製石器で両側縁に使用面がある。図201-6は礫器I類で石錘とみられる。図201-7・8は砥石である。7は二面使用のII類で、湾曲した使用面が見られる。8は三面使用のIII類で、緩く湾曲する各面に線状の溝が

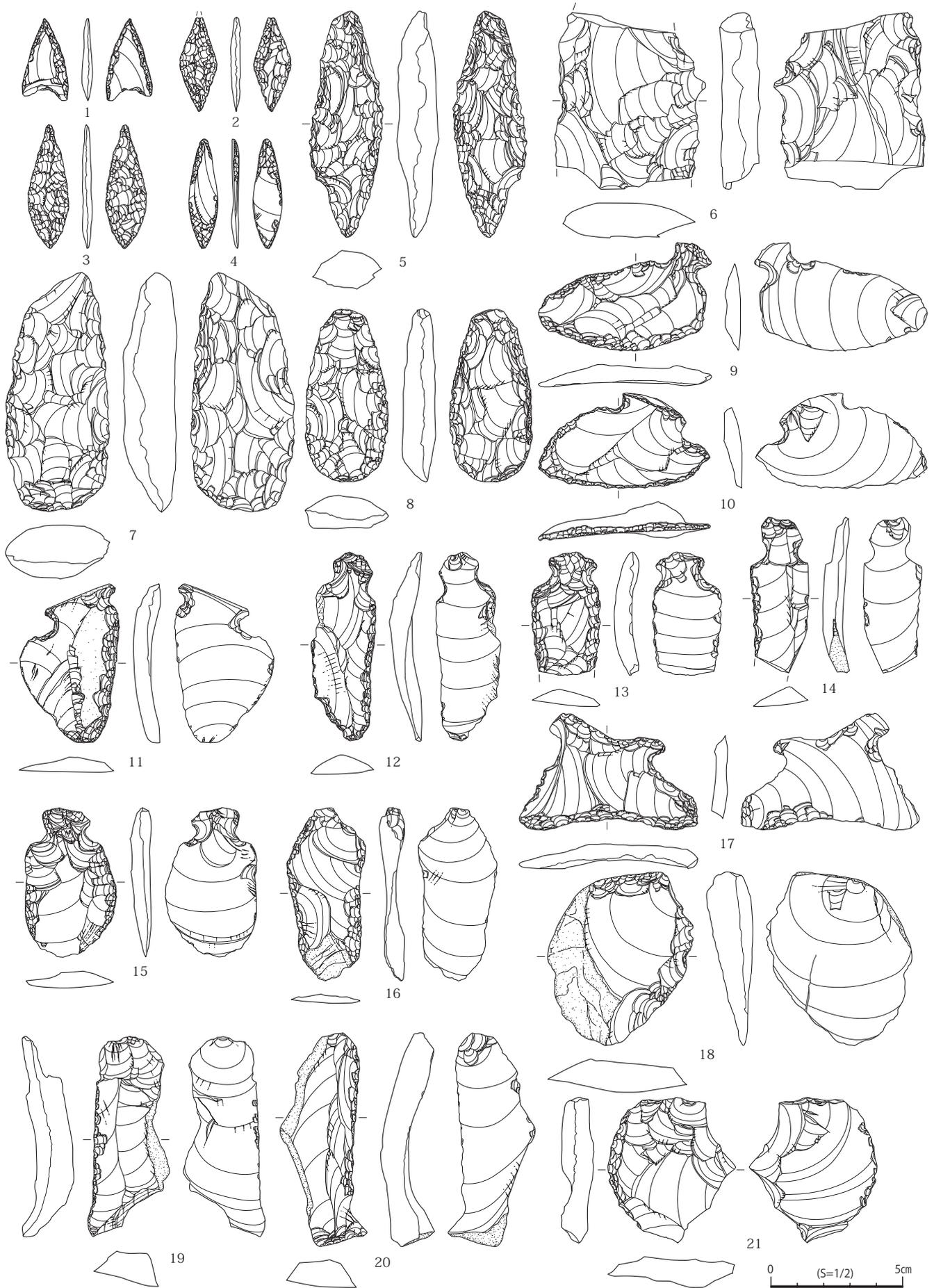


图198 沢支流4出土遺物(5)

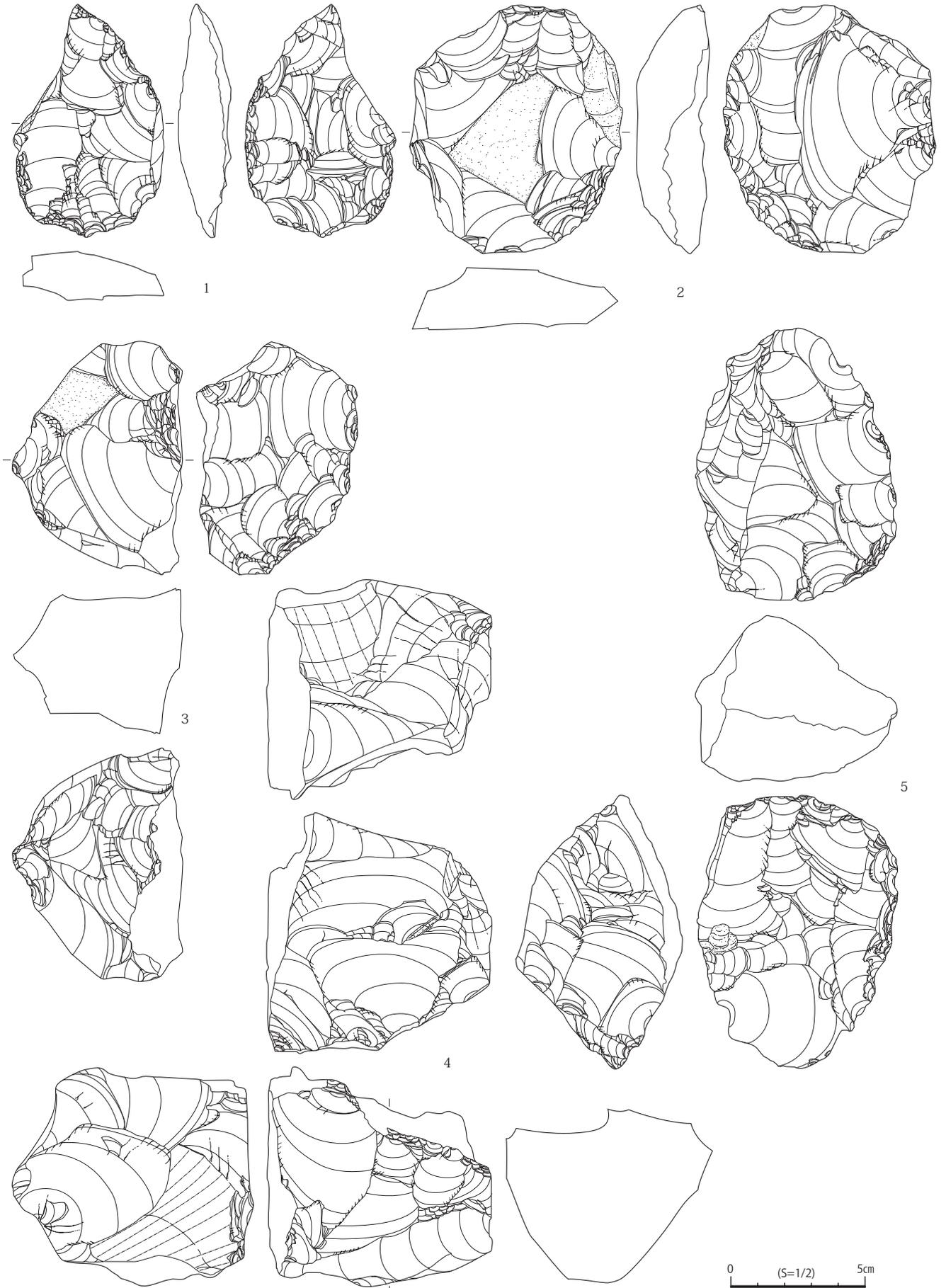


図199 沢支流4出土遺物(6)

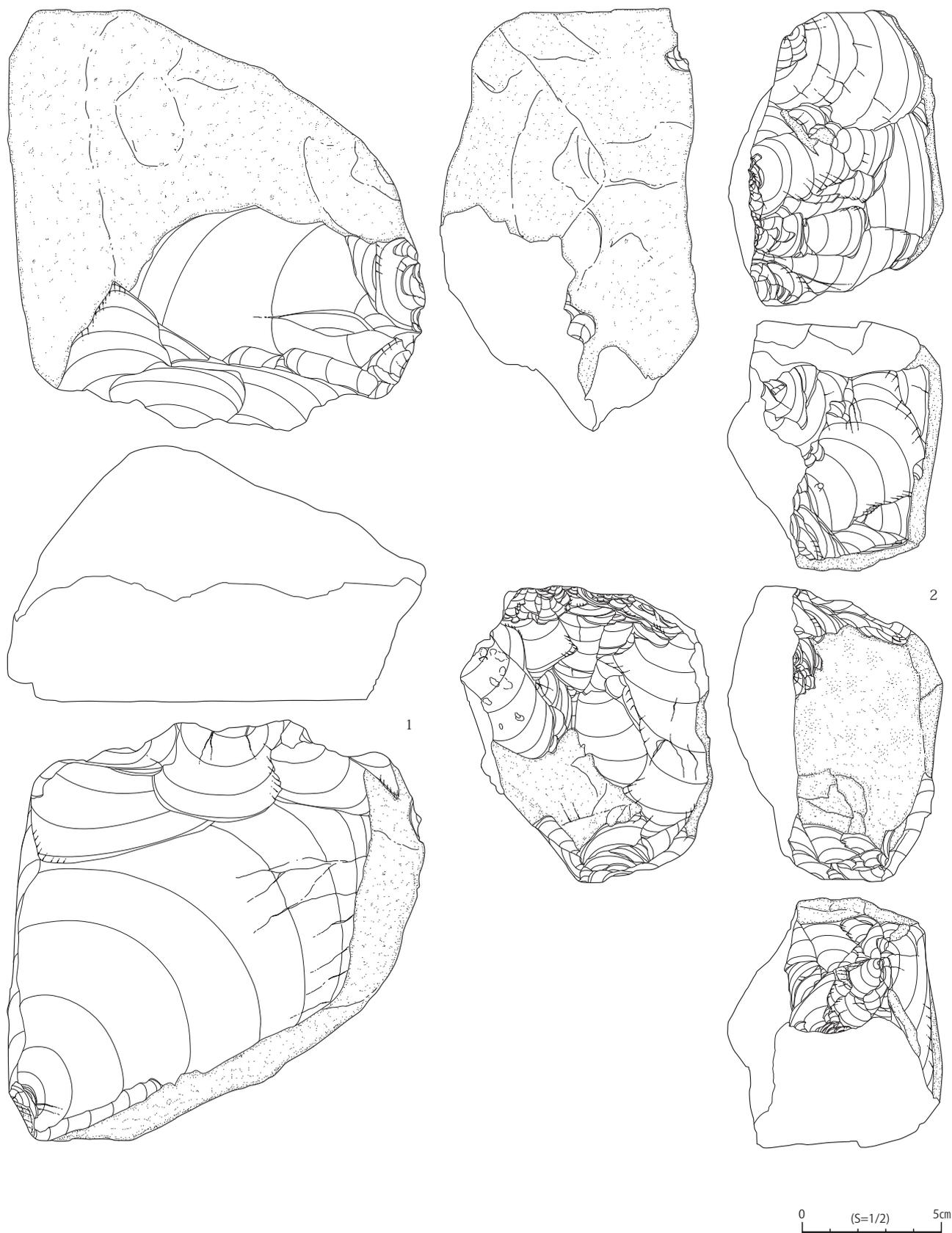


図200 沢支流4出土遺物(7)

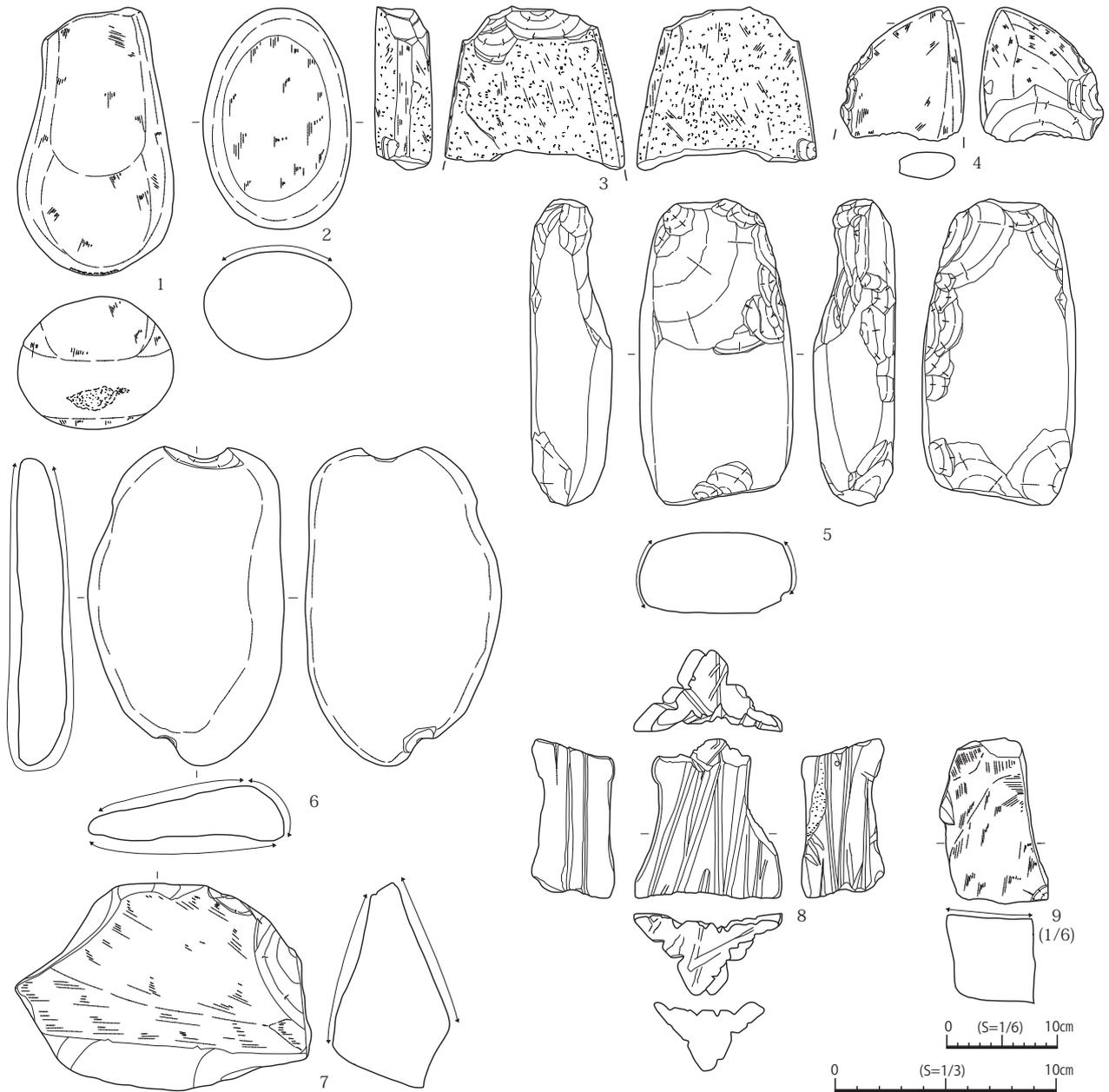


図201 沢支流4出土遺物(8)

複数条認められる。磨製石斧の器面の研磨調整、刃部の研ぎ出しといった使用方法が想定できる。図201-9は台石で原礫面使用の皿類である。(業天)

【小結】 沢支流4は、沢支流1や沢支流3と同様に沢頭を利用した小規模な遺物捨て場であり、時期についても他沢支流同様に前期末葉のある期間内(円筒下層d1期)において形成されたものとみられる。また沢支流3の項でも述べたが、該期の遺構はB区側の丘陵平坦面に集中しており、沢支流4の捨て場も該期の活動が本遺跡のB区南側を中心としていたことの証左となろう。(神)

B区第1号用途不明遺構 (BSX-1)

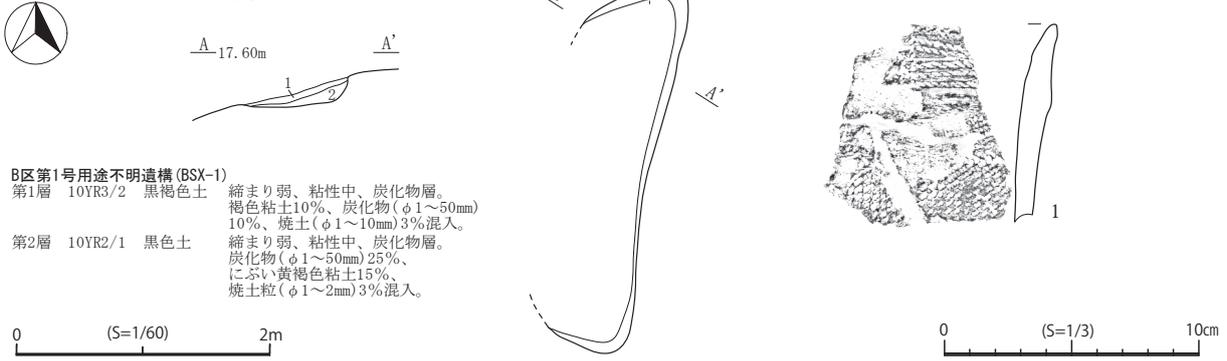


図202 B区用途不明遺構

10 用途不明遺構(図202)

1基検出した。B区南側のXIVE-127グリッドに位置している。Ⅱ層相当面で確認した。開口部で3×0.8mと細長く、深さ25cmと浅い。底面は平坦で、堆積土には炭化物が多量に含まれている。遺物はI群B類土器の破片が出土しているが(図202-1)、沢支流1が完全に埋没した後に構築されていることから、比較的新しい遺構の可能性はある。用途、時期ともに詳細は不明である。(神)

11 小ピット(柱穴)(図203)

4基の小ピットを検出したが、いずれも単独で点在している(Pit1268~1271)。2基の小ピットからはI群B類の円筒下層d1式に比定される土器が出土した(図203-1~3)。出土土器から判断して縄文時代前期末葉のものである可能性があるが、詳細については不明である。(神)

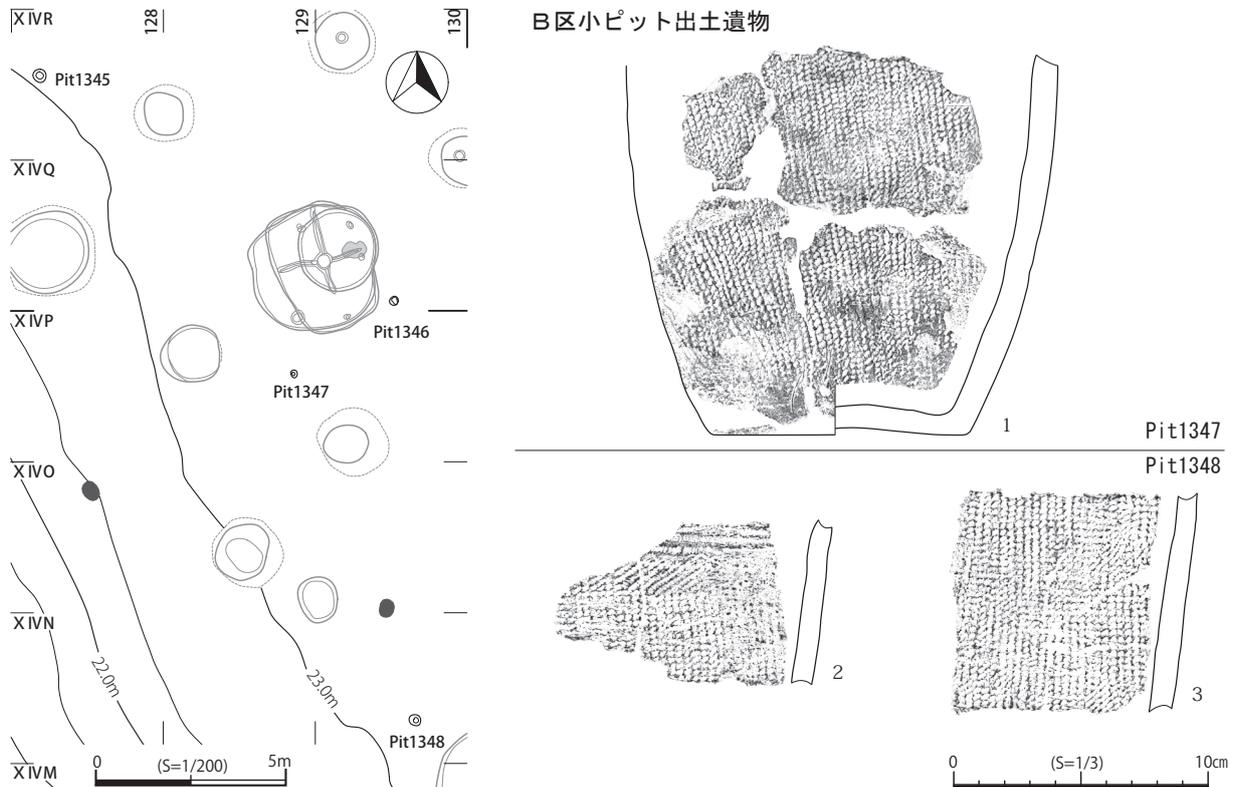


図203 B区小ピット(柱穴)

## 12 遺構外出土遺物(図204～226)

### 土器(図204・205)

B区遺構外からは重量にして約219kgの土器が出土しているが、A区と異なり細片が多い。時期については縄文時代前期から晩期までの土器がみられるが、主体は前期末葉から中期前葉である。

図204-1はI群A類で、前期後葉の円筒下層c式に比定される。口縁部破片で、単軸絡条体6類が施文されるものである。図204-2～16はI群B類である。いずれも口縁部に原体の側面圧痕が施されるものであるが、図204-2は口縁部幅が狭く、胴部には複節RLR縄文が斜回転施文されるものであり、円筒下層d1式に比定される。図204-3～6も文様構成等は図204-2に近いものであるが、共通して口縁幅が広いことや、刺突が施される(図204-4・6)等、後出的要素を含むものの、ここでは円筒下層d1式としておく。図204-7～16が円筒下層d2式の中核となるもので、前述の要素に加え、側面圧痕に使用される原体も太く、刺突の多用が目立つ。単軸絡条体の圧痕については5類または6類の使用もみられるほか(図204-8・11)、1類では軸が太くなり、巻く条の間隔が広いものもみられる(図204-11・14・15)。図204-13はR原体の側面圧痕だが、渦巻き状に施されるもの、図204-16は波頂部に隆帯の貼り付けられるもので、隆帯全体に刺突が施されるものである。

図204-17～21はII群A類で、図204-17は口縁部の側面圧痕間に原体の端部圧痕列が施されるほか、蛇行状の隆帯も付される。また図204-18・19は同一個体で、縦位の側面圧痕と渦巻状文が施されるもの、図204-21は口縁部に鋸歯状の側面圧痕が、頸部の隆帯間には馬蹄形状圧痕が施されている。図204-17～19は円筒上層a1式、図204-21はa2式に比定されるが、図204-20の鋸歯状沈線が施されるものもここでは円筒上層a2式とした。

図204-23,24は口縁部全体に隆帯と馬蹄形状圧痕の施されるものでII群B類の円筒上層b式に、図204-25は刺突の施されるものでII群C類の円筒上層c式に比定される。図204-22と26は明確な特徴がみられないものだが、およそ両群のいずれかに含まれるものとみられる。

図205-1・2は隆帯の貼付部位が胴部上半に及ぶもので、II群D類の円筒上層d式に比定される。図205-1は胴部全体にLRとRLによる結束第1種縄文が横回転施文され、その上から隆帯が貼り付けられているもの、図205-2は無文地に隆帯のみ施されるものである。図205-3は口唇への鋸歯状隆帯が施された地文のみの土器で、II群D類またはE類であろう。

図205-4～9はII群F類の椀林式に相当する。図205-4～7は波状の口縁部破片で、肥厚した口唇に太い沈線や(図205-4・5・8)、胴部に2～3条の横位沈線が施される(図205-4～8)。なお図205-8は大型の深鉢でB区第22号竪穴住居跡から同一個体が出土している。図205-10は無文の口縁下に円形の貼付が施され、連続したU字状文が施されるキャリパー形の土器で、II群G類の最花式であろう。

また図205-11はV群B類とした大洞C2式の鉢である。該期の遺物では遺跡全体でも唯一のもので、口縁下には横位の並行沈線が3条施されるものである。(神)

### 剥片石器(図206～220)

B区の遺構外からは、石鏃40点、石槍24点、小型石槍100点、石篋22点、石槍または石篋の破損品13点、石匙21点、石錐10点、楔形石器3点、異形石器2点、スクレイパー類310点、両面調整石器31点、石核353点、R・f 64点、U・f 36点、剥片・碎片約246kgが出土している。出土層位は第I層か

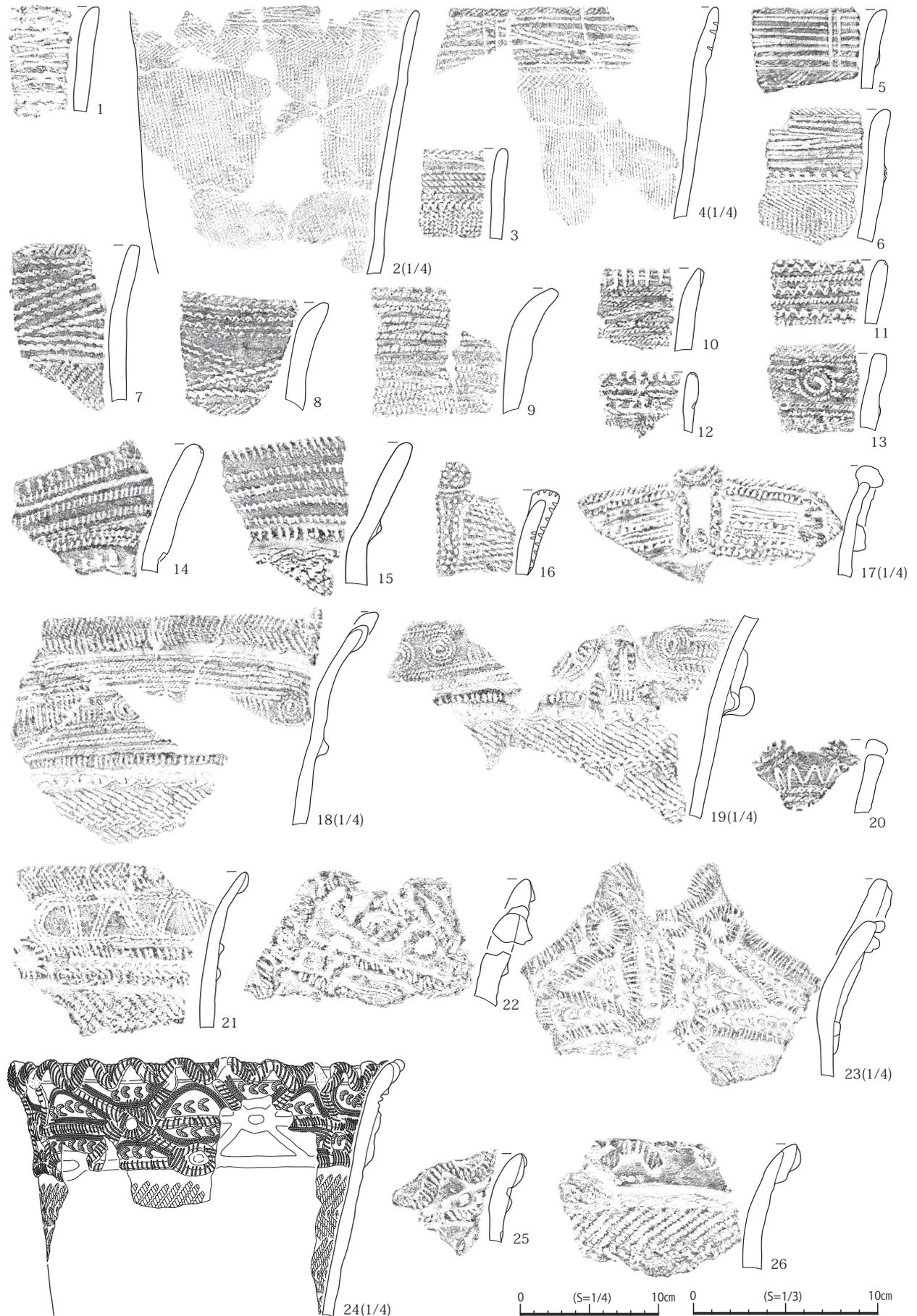


图204 B区遺構外出土遺物(1)

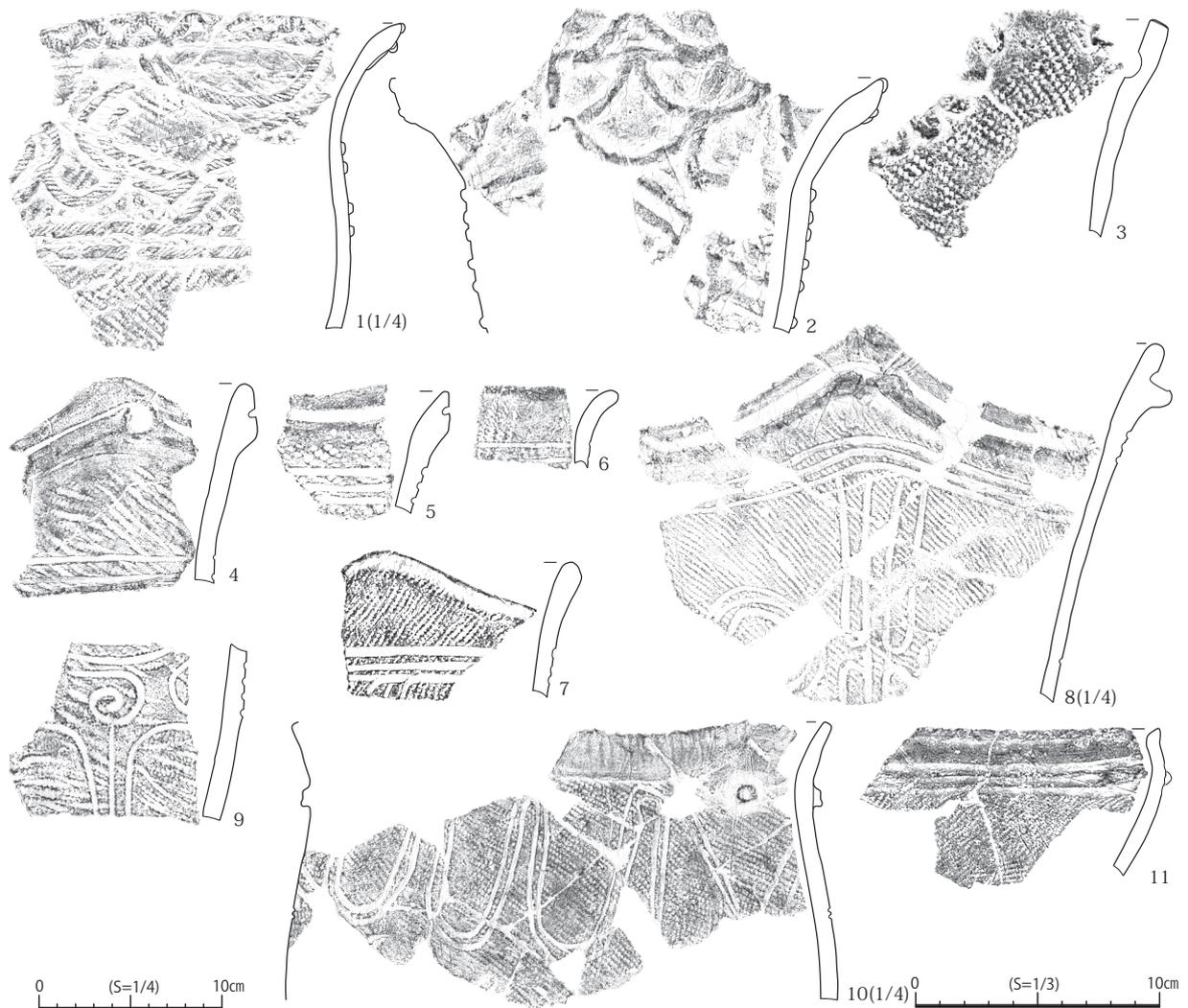


図205 B区遺構外出土遺物(2)

ら第Ⅲ層中でほとんどがⅢ層から出土している。剥片石器類は形態から礫石器類は整形痕と使用痕跡別に分けた。以下に各器種ごとに記述し、各石器の出土位置や石材等については観察表に記載した。

石鏃(図206-1～16)：16点図示した。図206-1はⅠa類、逆V字状の鋭角な抉りで基部が作られている。2は棒状錐様の平面形状でⅠc類とした。先端が被熱で爆れている。図206-3～9はⅠd類。最大幅を器体中央部にもつもの(図206-3・6・7)と基部側にもつもの(図206-4・5)がある。図206-8はⅡc類で、なで肩状の基部である。図206-9～16はⅡb類とした。抉りの浅い図206-10・11はⅡc類に、図206-12・14はⅡa類にも見える。図206-15は鏃身と茎部がアンバランスであり、小型石槍を再調整して作られた可能性がある。図206-16は長い茎部が作られている。鏃身が二等辺三角形のもの(図206-8～13)、鏃身下半の両側縁が平行する五角形状のもの(図206-16)、鏃身が正三角形形状のもの(図206-14・15)がある。

石槍(図206-17～23・図207-1)：8点図示した。図206-17・18・21は器体に膨らみをもち基部が尖るⅠa類。図206-19・20・22・23・図207-1は器体側縁の湾曲が弱いⅡ類で、Ⅱa類が(図206-20・23)、Ⅱb類が(図206-19・22・図207-1)。図206-17・20・21は比較的大まかな剥離調整で、他は細かな調整で形状が整えられている。図206-17は腹面中央に素材剥片の厚さを取り切れずに残

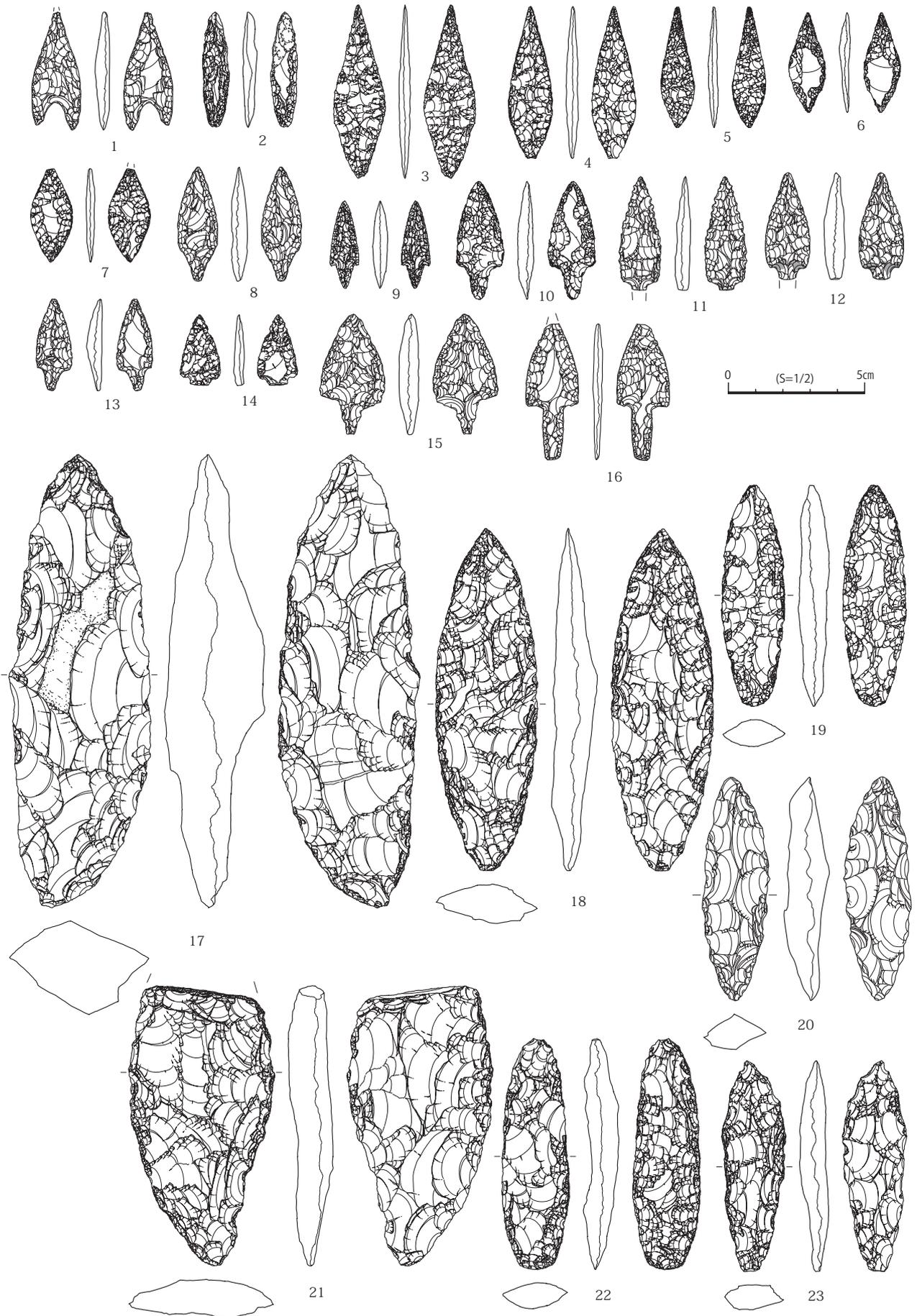


图206 B区遺構外出土遺物(3)

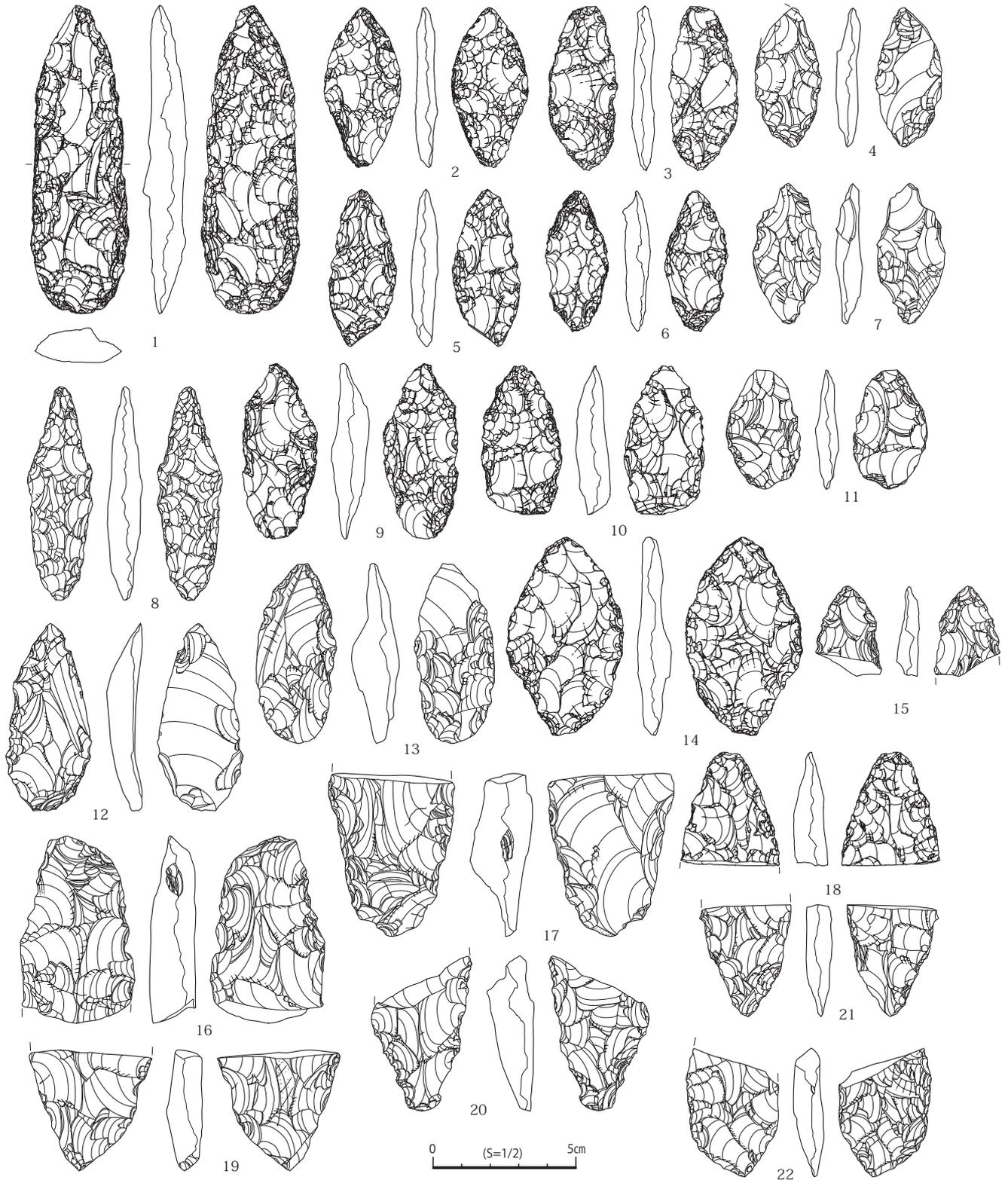


図207 B区遺構外出土遺物(4)

している。図206-21は折損後に破損面が再調整されている。22・1は断面形状から石槍としたが石筥でも機能した可能性がある。

小型石槍(図207-2～22)：21点図示した。図207-2～7・9～11・14は器体に膨らみをもつI類。I a類(図207-2～7・14)、I b類(図207-9・11)、I c類(図207-10)。図207-8・12・13は器体



图208 B区遺構外出土遺物(5)